

第4回「ガーデンシティ函館」検討懇話会 会議録

【開催日時】 平成28年8月19日（金） 15:00～17:00

【開催場所】 函館市役所8階大会議室

【出席者】 委員）木村委員（座長），古地委員，菊池委員，岡田委員，
松崎委員，齋藤委員，高田委員，安立委員

オブザーバー)

北海道開発局函館開発建設部 畑山道路計画課長
渡島総合振興局函館建設管理部事業室道路課 河本主査

函館市) 企画部（事務局）

種田部長，田畑計画推進室長，竹崎新規政策担当課長，
木谷主査

土木部

榎本道路建設課長

都市建設部

長谷山景観政策担当課長

経済部

中村中心市街地担当課長

観光部

本吉観光企画課長

港湾空港部

平野主査

ほか

【次第】 1 開 会

2 議 事

(1) 「ガーデンシティ函館」の実現に向けた取り組みについて

(2) その他

3 挨拶

4 閉 会

【木村座長】

それでは、今回は最終回の第4回ということで、よろしくお願いします。

最初に前回の振り返りをしていきたいと思いますが、これについては、第3回検討講話会の発言要旨ということでまとめています。後ほど本懇話会の報告書について議論する時間を頂戴しますが、その中でこの発言要旨、過去3回分も含めとても貴重なご提言をいただいております、これをベースに報告書を作成していくこととなります。

一番のポイントは、前回の開港通りの整備に関するフィールドワークを行いました。これに関する追加の発言を頂戴したいと思っておりますが、基本的にガーデンシティ構想を進めていくうえでの様々なコンセプトについて、たたき台の中で述べており、その内容をいかにデザインし施工していくかという、具体的な事例としてこの開港通りの整備に関する議論をしてきたということで、その中で、気になるのは、高いデザイン性をどう実現するのかということと、その中にはもちろんストーリー性が必要ということ、これは構想の中で挙げている地域ごとに持っている性格とそれをどう表現して、街路、車道、歩道、それから様々なエクステリアを含めてどう実現していくのか、ということについて十分に検討してほしいんだと、言葉として少し強くなりますが、半可通な状態です、十分に咀嚼せずにデザインすることは避けてやっていただきたいということが1点。

もう一つは、地域住民を含め市民とも関わりがありますが、市民などと協働していくことをどう考えたらいいか、そうしたことを踏まえて実施してもらいたいということが前回の議論の中心だったと思います。

各委員からの発言については議事録でも確認していただいておりますが、これでよろしいでしょうか。

それでは今日の話題に入っていきますが、まず開港通りの整備に関するフィールドワークについて、発言要旨により振り返らせていただきましたが、整備に関して追加でご意見があれば頂戴したいのですが、いかがですか。

【高田委員】

ざっくばらんに毎回お話しさせていただいているので、まとまってきたんじゃないのかなという認識があります。

せっかく委員をやらせていただいておりますし、あまり中途半端なこともできないなと思ひまして、この期間毎日ではないんですが、ふと思う度に考えてきたんですね。

やはり高いデザイン性に関しては、高いお金がつかまとうというのが事実です。我々は、できるだけ安い値段でできるだけカッコいいもの作ってほしいというのが日常なんです、さすがにそこそこのものを作るには相応の値段はかかりますよというのが現実です。最近世の中だいぶ変わってきてまして、行政の取り組みですから正しいか分かりませんが、クラウドファンディングみたいな方法も一つの方策としてあるのかなと思ひました。というのも、私も18の時に函館を出まして、40になるまで東京で暮らしてまして、そういう人間って世の中に結構多いと思うんです。我が街の通りをこのように整備をするっていうことをもう少し広く告知できれば、例えばどこでもある取り組みですけども、敷石一枚に自分の名前を刻印できるとか、1人当たり数千円でも集められると、もう少し資金の捻出につながるのではないかと。その捻出できる費用と言うよりは、自分もそこに携わったんだという愛着といいますか、気持ちが入っていくような感じ

もあると思うんです。資金的な実用性というよりは、いろいろな人がそこに注目して愛着を持てるような取り組み、目新しいものだけが正しいわけではないんですが、いろいろな取り組みが各地で行われていますし、北斗星の保存もそうですよね。僕もすごいなと思って、あつという間に1千万円も集めてしまうわけですから、そういうことも一つの方策としてあると思いました。

僕の建築の仕事でも、旧梅津商店さんを函館工芸社さんにリノベーションするときに、持ち主が1枚いくらかでタイルを販売したんですね。それを修復する資金に充てようという取り組みが、結構な資金になるわけです。工芸社さん、梅津商店さんっていうのは、函館の方なら知っている人が多い建物ですし、自分の持ち物ではないけれど保存には協力したい、と1人1人では少ないかもしれないけれど、全国規模では函館出身者も多いですし、GLAYとか北島三郎とかもいらっしやるわけで、ものは考えようというか、アイデア次第かなという感じもしました。

【木村座長】

クラウドファンディングって基本的には用途がはっきりした募金だと思えますが、募金した方にも何らかのフィードバックがあるという方法ですよ。

齋藤さんが開港通りという名前を付けようと頑張ってきた経緯があり、そこで名前がつくと対象もはっきりしてきて、クラウドファンディングというような募金活動を誘発できるようなきっかけになるわけですよ。「中臨港通り」に募金してくださいといってもなかなかフォーカスが絞れないと思いますけど、そういうネーミングにすると、いろいろなことが求められるのかなと思いますが、追加の意見はございませんか。

【安立委員】

前回、歴史パネルの資料をいただきました。現在開港通りに展示しているパネルもよく見るんですが、やはりあれでさえ立ち止まって見るのはしんどい。文字の量とか、反対から歩いてくると読みづらいとか、いろいろな人の行動と合わせた読みやすさというのはなかなか難しいと思うのですが、資料にある案ではさらにそれよりも文字を中心に読ませる、内容を伝えることが主眼になっています。パースを見ると、そのパネルをベンチに座って眺めるという絵になっていますけど、とても字を読み切れない。通りながら見るにも難しさがありますので、どういう人がどういう状況で見るのか、何のために見せたいのか、という実際の人間の行動があまり意識されていなくて、ただ歴史を伝えることが目的になるところいうアイデアになってしまうのかなと、残念に思いました。

私がやっている観光サイトでも、例えば、ペリーの函館での足跡みたいな記事を作るにしても、文字であればすごい分量の情報を、スマホで現地で見ると、それにふさわしい文字量と写真で綴っていくようなことを考えます。どこで誰がどういう目的で見るといえることをはっきり考えて作っていくという観点で、これから修正していただければと思います。

【岡田委員】

以前木村座長と、函館市で公募したミシュランガイドの星を取った場所を紹介するパネルのデザインの審査員と一緒にしたことがあるのですが、その時は3案あってどれが効果的か審査する会だったのですが、実際深く追求すると、そこに

看板は必要なのかというところから本来はスタートしなくては行けなくて、実際にその審査では、決まった場所に同じ大きさの看板が設置されると決定された状態でのスタートだったのでどうすることもできず、その中で一番、周りの環境を壊さないとか、読みやすいとか、色が激しくないとか、グラフィックデザインのお話だけをして、やはりこれからはスマホなどいろいろな情報を手にできるので、通りが素敵だねっていうために作られる開港通りの横に文字がいっぱいあると、ちょっとよろしくないのではないかなと、デザイナーからの視点で思います。

それなら木が1本あった方が美しいし、花が1輪咲いていた方が綺麗だろうし、ということだと思いますので、そのあたりを、そもそも必要かということから考えていくべきだと考えております。

【木村座長】

手元にない資料についてのお話で申し訳ないのですが、これは函館の歩行者用の案内標識の整備計画というもので、平成22年2月に公表されています。

私の認識では函館市の土木部が主導的に関わって作ったもので、道や国も全面的に協力して作ったものなのですが、この中に今回のガーデンシティでも話題になっている、地域ごとのコンセプトに従って、色や形について、そして使う書体について、それから評価もしていて、外国人がそれをどう読んだら理解出来るのかということも含めて綿密な調査のうえで、提言をされているものがあります。

平成24年には整備が終わっている形にはなっているのですが、その後も更新したり、現況が変われば即座に内容が更新されていて、今回の問題提起ということだと思いますけど、歴史パネルについて、エクステリアを含めてなんですが、道路を整備していく中で、従来行っている標準設計、標準的な部分は、十分に考慮してやっていただきたいということだと思います。それに、その時代にあったもの、その場所での要請というのが出てきますので、いろいろなことを考えなければいけないんですが、基本に立ち戻ってこういう計画書がありますので、これを踏まえてやっていただければと思います。是非それをベースにして考えていただきたい。

これは土木部の方だけではなくて、今回のガーデンシティでは、部局横断的にこの道だけでなくガーデンシティ全体に関わっていくということになりますので、各部局でこの構想で行っていく整備については踏まえていただきたいと思います。だいぶ前から出てますけども、高いデザイン性を確保するうえで本当に基本にある部分であり、プロデュースの基盤になるものだと思っておりました。

ほかにございませんか。今日が最終日なので、できるだけ言えることは言っておきましょう。

【古地委員】

前日も申し上げたんですけど、高田さんがおっしゃっていたように、私も市民が関わるような形ができれば、時間がかかるかもしれないんですけども、何らかの形で市民であったり観光客でもよいと思うんですが、そのような仕組みを一部でもいいので、行政として考えていただければいいと思っています。

それから開港通りというネーミングの話が出ましたが、開港通りというのは函館の歴史の中からきたネーミングだと思うんですが、その歴史が今後の街づくりとどう繋がっていくのか、歴史が未来につながる部分の架け橋が少し欠けているのかなという気がするんです。歴史を生かした街づくりと云ったときに、昔から

あるモノ、特に西部地区の空き家などを保存して、あるモノをどう未来の函館の暮らしに繋げて行くのかですね。開港通りというのも、昔開港して、じゃあ今、函館の国際性というものをどう考えるのか、というときに、外国人観光客にパネル1枚、敷石1枚貢献していただくような、もしくは在住外国人の知恵を借りるとか、函館の国際性が21世紀の開港通りというところにどのように表現されるのかとか。そういうことも考えながら、未来に向けてのビジョン、国際性ということを考えれば、そういうこともあっても良いのかなという気がしています。そう考えると、できるだけ市民や観光客にインプットできる形になればいいのかなと思います。

【菊池委員】

私の方からも、古地先生と重なるかもしれませんが、市民が関わる街づくりとか、ガーデン作りとか、そういうことについて、以前横須賀市の環境審議会に入っていたのですが、例えば、小さな緑を大切にしている、小さな緑というのは、それぞれの家の緑、庭を整備する。その小さな緑が繋がれば大きな緑になるので、苗木などを市から提供していたり、あとは外から見えるもの、「溢れ出し」といいますが、自分たちの庭と道路の境目に対して、植え込みをしたりプランターとかを溢れ出していくという活動が見られるところに関しては、植樹に関する補助金を市が出したり、苗木の交換、各家庭での苗木などを提供する仕組みがありました。そうすると自分の家の緑が市の緑になって見せたくなくなるとか、歩きたくなるとか、自分たちで溢れ出したプランターなどを飾っていくという働きかけがありました。大きく歩道を整備することも大事ですけども、やっぱりお金がかかってしまいますので、小さいことから何か動けるような仕組みが出来たらなと思います。

【木村座長】

この溢れ出しは市が関わっているものなのですか。

【菊池委員】

一般的な団地や道路に面している民家などが溢れ出しをするんですが、それを市が助成する、例えば、外側に向いている木に対して高さが3m以上とか5mになるものを植えたら助成する、という話がありました。

【木村座長】

確認したいのですが、こうした例は函館市の緑化政策の中にはありますか。

【事務局】

保存樹木という制度があり、その庭木には維持管理費を支援しています。

また、沿道花いっぱいという活動は、国道、道道、市道で、コミュニティ単位で活動したいという場合は、花苗をいろいろ取り揃えて6万株以上は提供しています。それに伴い植え込むだけじゃなくて管理もお願いするという活動は、10年以上取り組んできています。

【木村座長】

菊池先生の話聞いていて思い出したんですけど、東京の下町の路地などで、植木とか不思議なものがどんどん出てきているのが溢れ出して言うんですね。事務局のお話とは意味合いは少し違う感じがありますが。

【菊池委員】

そうですね。自分の家というよりも外に見せたい、そういう花いっぱい活動を個人的にする、というスタンスでいけば、点が線になるのではないのかな。もちろん先ほどお話しされたように苗木などを提供されていると思うんですが、もう少し重点的にしたい場所とか、活動的にやっていくのはどうかなと思います。

【木村座長】

1回目に折谷委員がイギリスでやっているオープンガーデンの話をしていたと思いますが、そういった部分についても考えていきたい。

溢れ出しというのは自分の家の前であったり、そこから面的にも線的にも広がるのもあるんですが、そういう風に広がって行って、隣の家もやってるからうちもと広がっていくのは、道路という公共空間を私的に活用するのは確かにどうかという問題もありますが、例えばちょっと古くからある団地の1階が自分たちでパブリックな空間をプライベートに使っていて、それが半公共的にみんなで共有していく形になっていくというのはあります。

【高田委員】

高いデザイン性という、最終的なこの懇話会のキーワードが宙に浮いているようですが、皆さんの話を聞いていると、デザインというのは、誤解しないでいただきたいのですが、今の時代は非常に優れた傑出した1人のデザイナーが独断で行うことではないんですね。世の中が参加型デザインに非常に置き換わってきている。もちろん一方ではそれを統括していくマスターアーキテクト、街づくりという函館の西部地区なんかで関わっていた岡田新一さんのようなマスターアーキテクトみたいな人材は必要だとは思いますが、関わっていく人間が多ければ多いほど、デザインのクオリティーの高さ、高いデザインの質というものが担保されていくような感じがするんです。それは、結果ももちろんより多くの方のみなさんの意見を反映出来るという側面もありますし、その取り組み自体がデザイン、高いクオリティーを持ったデザインであるというような捉え方もできると思うんです。

いずれにしても、できるだけ多くの方に興味を持っていただいて、俺ちょっとあそこに関わったんだよ、少しの間だけでも考えてみたんだよ、というような状況を、できるだけ多くの人を巻き込めるかというのが、高いデザイン性を担保する一つの条件かなというような気がしました。

もう一つは、デザインといってしまうと、どちらかというと商業ベースと聞きますか、対価をいただいてそれに見合うものを制作していくという側面があります。目指すべきは、デザインが上かアートが上かという話ではないんですが、もう少しアートの側面で物事を捉えてもいいのかなという感じがします。歴史的な史実を見せるパネルにしても、例に出しちゃいますけど、函館でも丸い筒でやった例（※リトファスゾイレ）がありましたよね。あれはすごく良かったと思うんです。あれは史実を見せるパネル的な意味もありますけど、その連続自体がフ

ォリーといいますか、彫刻的な要素として街中に点在していく。その一つはアートのような状況を作っていたと思うんですよね。デザインということが最終目標ではなくて、成果物がアートとしても成立するようなそれが街中に点在していて、街全体が美術館的な機能を広い意味で持てるような、そういう所まで目標を高めているということも、高いデザイン性というところにはあるのかなと思いました。

【木村座長】

今の話なんですが、岡田さんに聞いた方がいいのかな。東京五輪のエンブレム問題なんですよ。岡田さんが入ってらっしゃるJAGDAでは、大変著名デザイナーがエンブレムを巡って大議論になりましたが、優れたデザイナーがこれがどうだといって提案したものがあの惨憺たる状態というのは、やはり質の高いものを追求しているデザイナーと、2回目のエンブレムについては、参加しているという気持ちが国民的に高まったという印象を持っていて、あれが一つの象徴的な、それが今回の道路に関する議論にそのまま当てはまるかどうかですね。そして気分というか、市民全体のデザインというものを作っている中で重要な示唆があるんだなと思っているんですけど、岡田さんコメント頂けますか。

【岡田委員】

すごく重要で、難しいお話ですが、JAGDAという日本で一番大きいグラフィックデザインの協会なのですが、この前のエンブレム問題で、比較的ケースケースで色々考えて、回答を出して、書面になって、会員のところに届いているのですが、やり方自体は問題無いというのが概ねの方向で、公募するとデザイン能力が下がりますよという前提が国際的にも国際グラフィックデザイン協会などにもあるんです。

というのも、公募してみなさんから集めてしまうとそれっきりになってしまいます。そうではなくて、キャリアがあったり実績があったり、考えをきちんと作ったロゴに反映させたり、それを操作する手順を踏まえて考えてる人じゃないと、今後デザインを展開するときに使いこなせないから、公募にして投げっぱなしにしないで、ある程度キャリアや実績のある人から集めたいと。そうすることで深く考えて案を提出してくるので、デザイナーの力が発揮できます、というのがデザイン団体の大きな考え方です。平たく言うと、みんなから公募して抽出するよりもキチンと1人のデザイナーとクライアントで向き合っていて考えていきましょうというのが目標ではあるんです。ただ世論的になかなか理解していただけない。私の口から言っても分からないことが多かったとは思いますが、エンブレムなんて誰でも簡単に描けるでしょ、というようなニュアンスから一般公募が良かったりすることもあるのは事実です。

一般公募をするとデザインの質は下がってしまうのですが、それはプロの目から見たときの評価であって、このプロが作ったものより一般公募のものの方が綺麗だし華やかだねということではなくて、それを展開させたり色んな媒体に使ったりする操作するときにプロが携わっていないといけませんよと。私個人的には公募の形よりは本当は先ほど高田さんがおっしゃったように、みんながやるというのは、みんなを巻き込んでやるんですが、そのトップに立つ人はある程度の未来予想図みたいなものを描いて進んでいくべきであって、その人がイニシアチブをとって皆さんを引っ張っていくということが素敵なことで、狙っていくべきだと思うんです。プロデューサーというか、それはきちんと立てていくべきではない

かと思えます。

【木村座長】

もう少し議論をしたいところですが、かなりいろいろ出たなと思ってますが、他にございますか。齋藤さんどうですか。

【齋藤委員】

論点をどこに絞ればいいのかなど思っていたんですが、前回開港通りを見て整備に関するたたき台について話をしましたが、このたたき台、非常に評判悪かったように思うんです。これを基に各論で出た意見を混ぜて、開港通りを推し進めるのか、全くゼロベースにして例えばコンペなんかで新たに設計するのか、そのことをこの懇話会で話すのか、また全然違う全体のグランドデザインのことを話すのか、ということが非常に見えにくくなっていて、意見も言いづらくなっているところですが、その辺はどうなのでしょう。

規制の話も前回出ていましたし、もちろん皆さん参加型で、植栽のことを言いましたけど、函館半分冬なので、特に開港通りは段々増えてきて、うちでももっとたくさんお金をかけてそれが全部つながって金森倉庫の方までつながればいいななんてと思ったんですけども、そういう話をするべきなのか、あるいは開港通りに絞って我々でデザインをもっと突き詰めていくべきなのか、その辺が分からなくなってきました。

【木村座長】

これは事務局からお願いします。

【事務局】

懇話会での議論の論点について、この懇話会では、ガーデンシティ函館について皆さんで自由にお話をいただき、様々な意見を頂戴したいというのが趣旨であり、その皆さんの意見を踏まえてガーデンシティに関する考え方を取りまとめていきたいと考えています。

その材料の一つとして、これから整備しようとしている開港通りについて、わかりやすい事例として皆さんにお示しした上で、どんなイメージが適切なのかということについても自由にお話いただきたいと思っています。そういった意味では、ゼロからではなくてある程度市が考えていることに対して御意見をいただきたいということですがよろしいでしょうか。

【木村座長】

齋藤さんどうですか。基本的には、齋藤さんのお考えを率直に言っていただければと。

【齋藤委員】

ちょっとコンセプトが見えないというところですかね。どの程度のことをやるのか、ただ道を綺麗にするのか、ガーデンシティを考えるにはちょっと足りないんじゃないのか。そのためにはもっと考なければならぬことがあるんじゃないの、と言うような気がします。

金沢なんかはいろいろと規制があって、明らかに他の街と違うんです。ローソ

ンは青じゃないし、そういう所まで規制があるからこそ独特な街並みができていると思うんですが、その辺まで踏み込むべきなのかどうなのか、そういう話をしに行く懇話会なのかということも思ったんですけども。

【木村座長】

今お話があったことですが、開港通りを実際に見たのは、私の理解ではサンプルとして議論しやすいということです。ただ齋藤委員がおっしゃったように、ガーデンシティ構想自体の全体図に関するご意見をこれから頂戴していくんですけども、今の規制の話、そういう考え方については報告書の中に盛り込みたいところですので、この場でご発言いただきたいなと思っています。

開港通りについては、ガーデンシティ函館の目指すべき理想像ということになるかもしれないですし、実現に向けた手法ですね、例えば規制に関することも手法に入ってくると思いますし、背景にはその目指すべきものが理想像として与えられているからこそ手法というものが出てくると思いますので、それにもご発言を頂戴したいと思います。齋藤さん続きお願いできますか。

【齋藤委員】

このたたき台というのは既にこういう方向にすると決まっているんですか。それともまったくゼロベースにして変えることもできるのか、その辺も含めてですね、でないこの懇話会の意味も無くなってしまうのではないかという気がしますね。

【事務局】

実際の整備事業とガーデンシティの考え方との整合も考えなければならないと思っています。ただ、今回はイレギュラーというか、ガーデンシティの構想を考えながら開港通りの整備が事業化直前という状況もありますので、なるべく皆様のご意見を承りながら、取り入れられるものは取り入れて、デザイン性も含めて、我々で考えていきたいと思っています。

ただ、今ここでどういう道路がいいということまで深く突き詰めていくには時間がない部分もありますし、この講話会の位置付けとしては、ガーデンシティ構想自体についてどのように考えるかを論点に皆さんに議論いただきたい、ということでもよろしくお願いします。

【木村座長】

発言として例えばですけど、議事録に残すという形になるんですけども、ゼロベースで考えませんかというご提言があるというのであれば、それは僕としては承りたいなと思っています。

【高田委員】

実務家として日々デザインしなければならないことを仕事にしている身としては、例えば、どういうことを盛り込んで頂きたいかといいますと、少し難しい言い方になるかもしれませんが、我々の世界はテキストと違って文脈とかテキストということですが、その土地、その街、その歴史だったり、文化だったり、脈々と途切れずに続いている土壌のようなものがあるんですね。それは時に、ゲニウスロキという言い方をすることもあります。潜在的な、八百万の神みたいなイメ

一ジに近いんですが、それを我々デザイナーは発見しようとするんです。非常に初期の段階ですが、それは北海道で一番歴史のある街ですから、テキストを探すことには全く苦労しないくらい文脈はいくらでもあるんです。そういったことを手掛かりにしながら、それを現在に見合うストーリーとして紡ぎ直さなければいけない。それがデザイナーが一番再訴にやる初期の段階の仕事なんです。そこが多分、細やかな計画には少しまだ盛り込まれていない。作業の順番が逆になっているところがあると思うんです。

例えば具体的にどうするのかというと、ベンチを置けば人が座るだろうとか、花壇を置けば人は花を見るだろうとか、ということではなくて、何のために座るベンチなのか、なぜそこに花壇を置かないといけないのだろうか、ということを含めたこれまでの函館の持っている歴史や現在のニーズ、過去と未来、現在と未来を行ったり来たりさせながら、最終的なデザインの成果物にしていくというのが我々が日常的にしている仕事なんです。ですからその一番最初のステップがもう少し慎重に組み立てられると、これまで4回の中でキーワードのようなものがいくつかあると思いますが、ストーリーというお話も出てきましたが、ストーリーを作るためには、注意深い文脈の理解と、文脈といっても全ての文脈を使う訳にはいかないのだから、今回にふさわしい文脈を探し当てることもデザイナーの仕事ですし、それと現在を結びつけるような作業こそがデザインなんですね。かっこいい形とか、美しい、セクシーな曲線を描くことだけがデザインではなくて、それは最終的に現れてきたもの、最終成果であって、その過程がデザインのクオリティを決めていくものだから、一つひとつのネタには困らない街ですので、そういうところをもう少し注意深く捉えていくと良い結果に繋がっていくと思います。

本当にこの目抜きから見ると、函館山が一番綺麗に見えるからここにベンチをこういう角度で置くんとかですね。タイムズスクエアで非常に美しくシンメトリーに見える場所だからここに記念写真のスポットを作るんだとかですね。具体的にはそういうことです。人をどういう風に動かしたいか、どういう風に動くとより魅力的に見えるのかという目的があってそれぞれのものを配置だったり、形を作っていくので、目的をもう少し深く掘り下げるような作業が必要なんじゃないかなと思いますね。

【松崎委員】

先日町会連合会の会議がありまして、その時に懇話会の資料を見せながら話をしたのですが、これはどこの街なのか、函館のイメージはここから出てくるのか、何のために作るのか、市民も参加してつくるためじゃない、観光客だけのためのものか、という言葉も出ました。

とても函館のイメージはわからないので、プロの方々の話を聞いてきたのであれば、この次の会議でもう一度お話ししてきてください、と言われてました。まず函館らしさを出して欲しい、どん臭くてもいいから、函館にもう一度来たいと思わせる。例えば看板があれば分かる。函館にまた来ようという気持ちが湧かない。出席した会長さん方は、観光客であれば二度と来ない、つまらないという言葉が出されました。ですからもう少し函館というイメージを持ったデザインといいますか、やはりそういうところはプロの方と相談をし、また一般的な公募という言葉も出ましたけども、そういう公募も含めた中で、まとめをしたものを観光的に作るということは出来ないのでしょうか。そういうことで最後にお話しをさせていただきました。

【木村座長】

これは事務局の方で受け止めていただくということでお願いします。

開港通りについて、いろいろなご意見やご提言をいただき、ガーデンシティ構想全体に関する意見も含みながら進んできましたが、全体の話をもう少ししておきたいと思っています。

ガーデンシティというのは1回目の懇話会でも話しましたが、世界的にも色々な都市でも取り組みがあり、それに対して函館と付いている以上、函館らしいガーデンシティという考え方が必要になってくるということだと思います。現在のたたき台の状態にあっては、こういったことも盛り込まれているんですけども、半ばそれが実際に機能として設計、施工、反映するにはまだ段階が必要だなど、さきほどの開港通りの議論を聞いても強く感じるところです。ただこの場では何度も高いデザイン性の話と、コンセプトを実現するための具体的な道筋、文脈という言葉だったりストーリーという言葉だと思うんですけど、やはりその部分についての言及は繰り返し、そのことを実際にデザインするとき、施工するとき、また市民が参加するときにも意識して欲しいんだということだと思うんですが、もう少し全体について補わなければいけない部分のご提言を頂戴したいと思っていますので、加えてございませんでしょうか。

【岡田委員】

私の出身地の隣に清水町というのがあって、十勝千年の森という帯広の高野ランドスケーププランニングというところが総合的にプロデュースしている所なんです。そこは何が特徴かと言うと、何もないんです。広い広大な土地しかない。そこに特徴を出すために、いろいろなことを考えて、面白いガーデンを作った。山をコントロールして、川を意図的に作って、ここの道を歩いたらこの植物が見られて、こちらにはイスがあったり、というのを計算されて造られていて、これから1000年経ったら今と形は変わるだろうけれど、美しい森にしたいということで造られている。何にもないところでこれなんです。

函館らしさ、先ほど松崎委員がおっしゃっていた、函館らしさって何だろうと、同じように考えてみたとしても、函館山があって、海があって、それだけでも結構函館らしくて、港があって、こんなにも函館らしさっていうのはアピールしやすい土地柄なのにも関わらず、資料のパスがちょっといただけないのはそのためではないのかと。海、山、もっと他の建物があるとか、本当に掘り起こしたらいっぱい出てくると思うので、その辺を踏まえて、なんなら私、開港通りではなくもう1本海側なんじゃないかなと思ってます。色々あるでしょうから、開港通りという名前を付けて、あそこを整備するために動き出さないといけないのであれば、ガーデンシティ函館のプロジェクトというか、ガーデンシティ函館構想と切り離してしまってもいいんじゃないかなと思うくらい、今あそこを盛り上げるには少し無理があるのではないのかなという気がしています。

あと一つだけ、ガーデンシティのこと考えていると、河川敷が函館にはないんじゃないかなと。水って言うキーワードは海はあるんですが、湯の川にある河川をもっと整備して、水辺でお茶したりとか散歩したりとか、もうちょっと川をピックアップしても良いのかなと。あと、湯の川の海水浴場がなくなったことについては、市民が親しめる海がないのは問題なんじゃないかなと思っています。いろいろ細々と言わせてもらいました。

【木村座長】

今の水辺の話は海と親水性の話だと思うんですが、水と親しむという話は、たたき台の中では、具体的には項目としては上がっていないような記憶があったので、そこについては事務局にコメント頂戴したいなと思います。

【事務局】

親水というか川についてということだったと思うんですけども、今回歩いて楽しいというのがキーワードで、その中で、基本は西部地区の街なみをベースにししながら、各それぞれの街にあったスタイルで、街作りをしていこうというのがコンセプトというものになりますので、切り口として川を活かすことは考えられると思います。

まだ我々の考えが至っていなく、今回のたたき台に具体的な案が乗っていませんが、そうしたことも広く考えながら進めていきたいと考えています。

【木村座長】

これは港湾整備の部分というのは親水性のような要素は項目としては挙がっていませんでしたか。

【事務局】

基本的に港湾整備ですので、ある程度海に親しむということは事業のコンセプトにあると思うんですが、事業内容がまだどういう形になるのかが見えていませんので、現状では明確にお答えすることができません。

【木村座長】

たたき台の中では、都市空間形成の手法として、湯の川エリアでの親水歩行コースというのが挙がっていて、これは文言としてはあるんですけども、ちょっと委員の中でイメージできていないということだったと思いますが、例えば、湯の川の親水歩行コース整備は一応項目としてはあがっているんですが、事務局からコメントをいただければ、構想のたたき台の中では項目としてはあがっているということで進められると思います。

【事務局】

鮫川と国道の湯浜橋、ちょっと場所は説明しづらいですけど湯浜ホテルの裏、平成館の裏側に小さな湯浜公園というのがありまして、周遊できる散策路を将来的には公園と鮫川との一体整備をしていきたいなと考えています。

【木村座長】

ありがとうございます。一応たたき台の中では項目としては挙げて考えましょうということになっているとご理解頂ければありがたいと思います。

他にたたき台の全体像についてご提言いただきたいと思います。

【菊池委員】

函館という街は、観光客のものなのか市民のものなのか、という意見は別にしても、高いデザイン性を保持している街並み、例えば伝建地区やヨーロッパの街などでは、住む人たちが自分の住む街を快適に居心地良くするために、ブルーシ

ティのように、暑いから青い色の壁だったり、屋根であったりというように統一していった最終的にはブルーに統一されている、というところがあります。白川郷も、生活に根ざした家が連なって街なみを担っている。

まず大事なものは、全体的な話になりますが、それぞれの住民の意識が、先ほど高田さんもおっしゃってましたけども、文脈、歴史に根付いた街に暮らしていて、そこを壊さないような、それぞれの家であったり、店舗であったり、そういうものを作っていくということについて住民の意識を向上させることも考えていかなければいけないのかなと思います。

行政などから、ああしなさいこうしなさい、これからこうしていきます、っていう話をしたところで、住民に根付いていかないことには、ハコモノ行政は流行らないですけれども広い空間のハコモノ行政になってしまうのではないかと思います。どうか文化的景観、というのは言い過ぎかもしれないですけど、それを自分たちで作っているということ、意識の向上という意味で、ハード系事業、ソフト系事業とありますが、ガーデンシティ函館の実現に向けた主な実施事業の中にソフト系事業というのは非常に小さいような気がするの、住民意識の向上の活動ももう少し取り組んだ方が良いのかなと思います。

【安立委員】

先ほど、岡田委員が山と海があればかなりのストーリーがあるとおっしゃったので思いついたんですが、函館の誇る函館山夜景や昼景がなぜ美しいか分析されたものを見ると、やはり両サイドに海があって、2つの海に挟まれていることが挙げられることが多い。それを考えると、ベイエリアは歩く所や見る所が整備されてきていますが、反対側の津軽海峡の方、例えば住吉漁港から大森浜、啄木公園あたりを車で通るのが好きな方もいると思うんですけども、そっちの方は観光客に案内しづらく、まだ手付かずだなと思っています。

その2つの海を結ぶ1キロ通りという名前のついた通りがホテルショコラの所にありまして、それを地図上で見ていたんです。1キロ通りの名称がどういう経緯でつけられたのか知らないですが、これも両方の海を結ぶ1キロ、ちょうど歩いて15分くらいの道だということに目を付けて、またストーリーができるのではないのかなと思っています。1キロ通りの看板がやっとなついて、その辺を繋げて両方の海、そして海岸、そして1キロ通りという、これも一つのストーリーですね。道路の標示は、ブルーの横型の道路標識の看板でしかないのですが、最初は地図に載っていただけで看板も無かったので。1キロ通りの由来も多分ちょうど1キロ、歴史的に見ると、昔は500mだったのが埋め立てて両方広がって1キロというところと、2つの海と夜景の美しさみたいなところを、私も仕事柄、それを観光客にアピールするようなプレゼンできたらいいなと思っています。ガーデンシティとは少し離れるかもしれませんが、函館のストーリーとしてはありうるかなと思いました。

【木村座長】

やっぱストーリーですね。

【高田委員】

ブラタモリっていうテレビ番組、好きでよく見ますし好きな方もいるかもしれないんですが、デザイナーは割と見ていると思うんですね。

何であれが面白いのかというと、タモさんが毎回やっているような街歩きみたいなこと、あれがデザインの一番最初の仕事なんです。地図を重ねてみたり、かつてここには運河があったり、擁壁があったり、そうしたリサーチっていうんでしょうか。せつかく歴史のある街ですから、北海道の中では他の街に比べて必ずその歴史を辿れるし、整理もできると思うんです。そこに少しデザインのヒントがあると確信しています、デザイナーとしては。ひょっとしたらここには運河が通ってたかもしれないといった古い歴史を紐解く。先ほどのテキストをまずはリサーチするというのもそういうことも一つなんです。歴史的な地図を重ねてみると時代毎の変化も当然現れてきますし、ひょっとすると、本当にかつては魅力があったけど今は埋もれてしまっているものが、そうしたフィールドワークやデザインの非常に初歩的な作業をすることで発見できるかもしれない。それが番組の面白さですよ。

前回タモさんが来て、夜景は残念ながら大雨で見られませんでしたけど、我が街にはあの番組が続く限りもう1回チャンスがあると思うんです。その時に取材していただけるような場所がもっと増えているといいなと。

デザインというのはただただ新しいものを作るのではなく、かつてあった良いものを取り戻す作業もデザインだったりしますので、できればガーデンシティ全体を捉えていく中で、まずは大規模に、この街の歴史を地図の上から紐解いてみようとか、そういう研究的な下地が必要なのではないかという気がします。そんなところも視野に入れながらガーデンシティを進めていただきたい。

函館らしさって言うのは簡単なんですけども、じゃあ何だよ、と言われたら、僕も、すぐにはコレだとは言えません。すごく地道な作業の中で、これかもしれないなというのは思いつくのが僕らの仕事で、それでお金もらって、ご飯食べてますから。そういう地道な下準備もガーデンシティの計画の中には非常に必要なのかなと思いますね。

【木村座長】

今日も渡島総合振興局の方と北海道開発局の方にオブザーバーとして来ていただいています。今の発言でちょっと感じたこととしては、構想としては市が行う構想で、実は道路に関わる議論が多いので、国や道であるとかの立場の方にも、構想に参加するというよりも理解していただいて、事業するときには参考にしていただけたらな、ということで今日も同席いただいていると理解しております。

これは具体的に、今日昼ご飯を食べましょうというときには、みんなおなか空いてるので聞くわけですが、実際には、本当は中華を食べたかったのにお寿司だったとか、それならどっちでもいいねとか、具体的に変わってくると様々なことを考えていかなくては行けない。

ただ構想として考えた時には、最初は昼ご飯食べたいねとか、夜ご飯を食べたいねというところからスタートして、観光客であれば、函館に来てナショナルブランドのファストフードとはなりにくい。やはり函館に来た以上、函館らしいものを食べたいなど、それはおなかを満たすだけではなくて、そこに来たことに対する思い出とか、満足度とか、まさに議論してきたストーリーだと思いたいますが、ストーリーを楽しみたいと。

私もだいぶ前に、北海道のお寿司の大会にお邪魔して伺ったところでは、実は安定的にお寿司を提供するには、その地域じゃないものも十分に供給しないと、お客さんに満足していただけないんですよ、という話を聞きまして、そうだなと

思ったんですね。ただ、その中で1番のものを加工して提供して、まさにサービスの部分になるんですけど、そこに、函館らしい人情とか、あり方があると、函館でお寿司食べたな、というストーリーになるんだなと、その時に感じました。

そういったコンセプトに関わる部分について、たたき台の中に盛り込んでいるとは思いますが、例えば今のお話では漁り火通りですね、大森浜の部分については函館らしく、また、そこをつなぐ高砂通りのあたり、要するに両側の海を繋ぐということになります。またそこにはそれぞれ作用する立場の人たちがいる。そういうことに関しても、函館らしいストーリーが生まれることも、この場所での強い提言になるんだろうなと感じてお話を伺っていました。

時間的にはまだ十分とは言えないですけど、一応出尽くしたかなと言う気がしますが、先程腰を折ってしまったので齋藤さんからどうぞ。

【齋藤委員】

ガーデンシティという名前が先行してしまっていて、これはあくまで個人的な意見にですが、開港通りにあえて植樹する必要があるのかなというのが、違和感があるのはそこだと思えます。さっき話があったように、逆効果になってしまって、魅力のない道路になってしまわないのかという不安感を感じて、逆に商業施設が張り付かないような道になってしまうような気がしないでもない。その辺がちょっと心配しているところです。

【高田委員】

それこそデザインだと思うんですね。確かにやたらと木を植えたりすると、せっかく目抜き通りに見えてくるような函館山が全く見えなくなってしまうかもしれないですし、逆に樹木が全くないと乾いた印象を受けかねません。

これは直接的な解決につながるか分かりませんが、例えば、函館マラソンです。道路って面白いし、今までデザイン的には全く手つかずだった部分なので、逆にすごい可能性があるデザインの対象だと思えますよね。例えばこの道を走りたいとか、これは絶対函館マラソンに含めるべき、こんな良い風景の連続する道を走ってみたいとか、全国のランナーがあこがれるような、見方を変えるとそういう整備の仕方もあるかもしれないですね。例えば函館山から何キロとこっそり道に印字されてるとか、ゴールまであと何キロとか、毎年1回きりのイベントですけども、多角的に見ていくところが、それこそデザインのフィールドワークではないですけど、歴史を紐解き、365日のアクティビティを紐解き、その全てに対応することは難しいかもしれないですけども、その都度どういったことに対して、道路空間がその人の活動をサポートできるのか、よりよくできるのか、というのを非常に注意深くやっていくやっっていくということなんだと思えます。それが最終的には非常に美しい風景の連続として、街全体が美術館みたいな、街全体がガーデンというような位置付けを目指していくんじゃないのかなという気がします。

脱線しちゃうかもしれませんが、直島という瀬戸内海に浮かんでいる島があるんですけど、ベネッセが資本を投資して、島全体を美術館として仕立て上げている場所があります。極端に言えばそういう未来像も有り得ると思います。何か風景だけで人を惹きつけられるような、元々函館が持っている、テキストと言いますか、ポテンシャルの高さをどうやって実現していくか、それには非常に多角的な分析だったり、下準備が必要かなと思います。

【木村座長】

これも皆さんのお手元に資料がない中ご案内するのは恐縮なんですけど、今日齋藤さんからそういうお話が出てきたんですけど、道道五稜郭公園線のシンボルロードという、行啓通でしたっけ、函館土木現業所が作ったペーパーなんですね。2種類ありまして、実はこの中でびっくりしたことがあって、大変なお金をかけて整備したんですけど、その中でストーリーが述べたんです。例えば高速道路だったらこういうことは絶対書かれていないなと思ったんですけど、当街路におけるシンボルロードという箇所、当街路は将来の函館の文化、情報、商業、観光の中心にある五稜郭地区にちなんで、五稜郭のイメージをこのシンボルロードの中心テーマとして、街路灯、街路樹などを五稜郭と歴史的に縁のあるヨーロッパの雰囲気を出すように、などとあります。また、詳細の設計の項目、例えば街路樹のところでは、フランス、パリの代表的樹木であるマロニエを中心とした植樹帯をつくり緑の多い街にします、とか、防護策、歩道の舗装、道幅についても、全てにストーリーとコンセプトが明示されているペーパーが作られています。

それが具体的にはどういうアイコンで表現されているのかとか、これは整備した時点で作られたものなので、現在の樹木の状態ですとか、さらに函館市のパブリックアートのプロジェクトで彫刻が置かれたり、いろんなことをして20年近く経っていると思いますが、そうやって整備されていくものだと思います。

今も開港通りのことが話題になっているわけですが、樹木についても、植樹は冬の間に植えることはなくて、春になって一番良い時期に植栽に関しての計画が実装される時期が来るんだろうと思います。そういう意味では今日の議論によって、実際に計画をたてる人たちが頭を使ってやっていただくもんじゃないかなと期待するところです。

各委員の指摘は全くその通りで、私のデザイナーの1人として感じるのは、具体的な案をだすと、本当にいろんな意見が大量に出てくるものです。その中から1つしか施工の現場では選べない。また選んだところでまた様々な意見が出てくると、そうしているうちに最初に何を考えていたのかな、ということによくなります。そのときにコンセプト、ストーリーというもの、この場で繰り返し議論してきましたが、実際施工する立場やそれに関わっていく市民にも、ある程度理解していただけるチャンスになるんじゃないかなと考えてこの議論を進めてまいりました。

この後の話なんですけど、報告書をまとめていく作業をさせていただきたいと思っています。冒頭で申し上げたとおり、たたき台という部分とか、例えばさきほどの水辺の整備のこととか、これまでいただいた提言や意見をこの中に受け込ませていながら、発言要旨をそれぞれ見ていただいて、こういう発言をしたという確認をとらせていただいていますので、今回の発言要旨も付け加えて構想の本体の部分と我々各委員の意見・提言をプラスした、2段階になるんでしょうか。そういったものが最終形となると考えているんですけども、よろしいでしょうか。

私の考えなんですけども最終的には皆さんから意見を頂戴して、この後私と事務局で、もちろん途中メールでの確認とか実際の文書を見ていただくということもございですが、これはパブリックコメントを得るんですよ、公開の場での確認を頂いたうえで、前段では政策会議で市長と執行部の方にも見ていただいて、最終的に成案化するという形で進めていきたいなという考えです。

一応議論としてはこのくらいということになるんですけども、全般に対する提言ではなくて、各委員からの感想をお願いしたいと思います。これは議論全体を

振り返ってということになるかと思いますが、古地先生からお願いします。

【古地委員】

自分の中でも全体というもの考えた時に、なかなか難しいなとモヤモヤしながら考えていたんですけど、まず確認させて頂きたいのが、ガーデンシティの前に平成24年に木村先生も高田さんも入っていたと思うんですけど、「美しい都市空間の形成を目指して」とのつながりを個々の中を書くことはできないのかどうなのかということです。函館らしさというのが議論にでましたけど、その「美しい都市景観形成を目指して」の中で函館DNAという言葉を使っていますよね。今回のこの議論が平成24年の話と何が付け加わったのか、どう発展したのか、というところが分かると思うんです。「美しい都市空間の形成を目指して」は公開されてるんですけど。その点で言うとまた新たに新しいものを作っているのか、そうじゃないのか、一言で良いので、こういう議論があつて、更にそれが発展しましたというように書いて頂いた方がなんとなくいいのかなと。せっかくの議論が、逆にこれを読んだ市民もそちらを参照できるので、そういう点でもいいのかなということをおもいました。

それと、これは今後なのかもしれないですけど、この「ガーデンシティ函館の実現を目指して」という資料を市民が見たときに、自分たちのものとして捉えられるのかどうかというのが、まだ若干不安なところがあるのかなと。さっきの菊池先生の市民の意識と繋がっていくのかなと言う感じがするんですが。時間的に厳しいのかもしれないですけど、各地区の重点推進エリアの人たちのインプットって入っているんですかね。入ってないですよ。そういう点でも平成24年の議論に入っているのかもしれないので、そこがちょっと例えば西部地区の人が見たときに、DNAを継承した進化と保存の共存といわれたときに、ピンと来るのかなというのが。そういう点でも、平成24年のこの議論への参照があればそこの方で触れられているのかなと言う感じもなるのかなという感じがしました。

あと、平成24年の議論でもそうですけど、結局函館らしさと言った時に、一つのイメージになかなか集約できない。これは1回目でもそういう話になりましたけど、各地区の特性をどうブレンドして、函館というものを、函館というと西部地区というわけでもないと思いますので、西部地区のようなものを再生産するのではなくて、松崎さんもおっしゃっていましたが、不格好でも良いからその地区の特殊性がでるものがあると、それはそれで面白いんじゃないかなということはおもいました。

全体と個をどう繋げていくかという点では、プロデューサーとかマスターアーキテクトみたいな人が必要になっていくのかなと。これたぶん永遠の課題なのかなという感じもしています。ちょっと長くなりましたけど以上です。

【菊池委員】

私は第1回の時に確か高田委員がおっしゃってましたけど、テーマパークのような街がコンセプトになっていたと思うんですが、それが4回の議論を経て変化してきている気がします。

個人的な願望というかお願いなんですけど、函館らしさ、自分が個人的に旅行に行ったり学会だったりいろいろな土地へ行って、思い出せる街並みだったり街並みの色、トーンだったりしますが、その函館らしさというのを一つひとつのパーツだけではなくて、それを繋げたジグソーパズルではないですけど、面的に変

化していけたらなと思います。

そしてガーデンシティ函館という言葉がありますけど、観光客でも地元の住民でも、自分の庭にいる感覚、つまり歩きたくなったり、愛でたくなる、愛したくなるような街。花を愛したり、木の音、風の音の聞いたり、五感に訴える街というのがありましたけど、季節を愛でたり、木々を愛でたりするような街。それに対しては、これはちょっと極論かもしれないですけど、デザインは取捨選択というのもあると思います。そぎ落とした美しさもあると思います。先ほど齋藤委員が言っていたように、木が必要かどうか、植樹が必要かどうか、逆を言えば車を通す必要があるのかどうかとか。必ず全ての道路に車を通さなければいけないという決まりもないですし、歩行者専用道路もありますし、自転車専用道路もあります。そういう英断が必要なんじゃないでしょうか。例えば個人的に市電通り、市電がすごく函館らしいと私は思うんです。例えば、函館セントラルパークみたいな感じで車道を花一杯というかガーデンにしちゃうとか、何か英断というか、必要になってくると思うんです。全てを盛り込む、休憩するにはベンチが必要とか、ガーデンがから木が必要とか、道路だから車が必要とか、そういう常識に捉われないで、目的にあったもの、みんなの望むもの、もしくは人を動かしたくなるような仕掛け作りというか、そういうものを考えていく必要があるんじゃないかなと思います。それにはガーデンシティ函館がどのような方向に進んでいきたいのかというストーリーが、ストーリーというのがキーワードになっていくのかもしれないですけど、考えていく必要があると思います。長くなりましたが以上です。

【岡田委員】

全体的なプロデューサーの話は必要だなと思います。その前にきっとそれぞれで色んなことをやっていたときにラバラになってしまって、進んでいるから後戻りできない、みたいな話になるよりは、15年先のことを考えて動き出しましょうと集まった人たちなので、やはり動き出すのが少し遅くなったとしても議論を重ねて行くべきだと思ってます。

先ほど菊池委員もおっしゃっていた電車、市電通りって分けるのは私は賛同してまして、これは函館デザイン協議会の作品展で披露されたものなんですが、電車通りに車を通さないで、電車と人だけを通す。あと電車の構内に芝生を敷いて景観を良くしたりという提案をCGで作らせていただいたんです。こういう函館市民は私を含めてデザイン協議会メンバーが37人いるんですが、函館市のことを結構真剣に考えている人たちが、皆さんが思っている以上にものすごくいて、そのために汗をかく準備もできていれば、寝れないことはないんでしょうけど、頭を悩ませている人もいっぱいいると思うので、できればこういう機会か、専門家が集まっている機会がいいのか、それとももっと違う形が良いのかはわかりませんが、やはり先のことを一生懸命考えている人を集めてそういう機会が作れていければ良いかなと思います。

あとは、プロがやるべきことはプロにやらせた方が良い方に転ぶのではないのかなと思っております。以上です

【安立委員】

全体的な感想ですが、こういう形の委員で参加させていただくのはあまり機会がなかったもので、最初からこういう大きなプランにどういう風に私の意見なり

感想なりを言えるのかなと、とても戸惑っていて、やっとノってきたところで終わりという感じです。すごく大きな巨人をほんの端っこつついてるだけなんじゃないのかという感覚にも襲われましたし、想像していた以上に管轄といいますか、それは私たちの所ではないというような仕切りを強く感じた経験になりました。

やはり先にこういう形が出来て、その後に例えばそこでイベントやるなり人が入ってくるなり、順番はあるとは思いますが、最初からここで何をやるものなんだろうとか、そこができた後の活動だったり、人の動きを考え込んで作っていかないと、できた後でちょっと違うなという風になってしまうおそれはあると思います。本当に初期の段階で、例えばここでやるイベントのこととか、ここに市民が集ってそれで観光客の人におもてなしするとか、市民ガイドがいて、その街のことをもっと広めていくとか、前回も申し上げましたけれども、ソフト面、人の面というのを考慮に入れて、そういう垣根を越えて進めていただきたいというのが私の感想、願いです。

【高田委員】

良くも悪くも時代の節目なんだと最近思うんです。新幹線も来ちゃいました。最近やってるオリンピックを毎晩見てますけど、10年前だったら、卓球とかバドミントンとか水泳とかでメダルを取れるとは夢にも思っていない自分がいたんですよね。今はもう本当に強い選手に育ったなど。でもそれは10年前くらいからもうしっかりとした下準備緒をしてきたのが10年後くらいに成果が現れるんだということだと思うんですよね。

街をつくる、ガーデンシティって当然街づくりや都市計画、専門的には都市計画の話題だと思うんですけど、今日やったから明日結果が出るというようなものではなくてですね、10年、20年、下手したら50年100年、我々は150年前に開港した当時から脈々と続いている先人達の文化的な遺産で今生きている訳で、それは、私たちの世代、我々が死んでしまったらそこで終わるわけではなくて、次の世代に何を資産として残していくか、それが函館という街のテキストになっていくだろうし、資産になっていくと思うんです。なので、非常にラッキーな時代に僕は生まれて、そこそこ社会で仕事をするような時期にいて良かったと思います。当事者意識でこの座談会、懇話会に参加させていただきましたので、全然他人事じゃない感じで参加させていただいて非常に面白かったと思います。

【齋藤委員】

忌憚なく言わせて頂きますと、最初、ここでどういう話をするのか正直分からなかったですね。本当に道のこと、どういう道路にするか細かい部分から見る、見て意見を言ってこういう道路にしようという話をするのか、と思ったんですけど、第1回に出たとき、おそらく全体的なグランドデザインをイメージして、コンセプトを描いて、それを実現するための手法を我々で考えていきべきだなど、1回目です。けれども、そこに開港通りの具体的なものが出てきてしまったことで、やっぱり各論を議論しなければならないのかなと、しかも我々が言ったところでこれがどうなるのかなという部分が出てきて、さらに言えば、余りにも評判が悪かったものが僕は今非常に不安になっています。これが起きてしまったことによって、観光客が来なくなってしまうのではないかなというところまで思っているところなので、個々で議論されたことは、今後どのように反映されるのか、具体的にほぼ決まっていることが覆ることがあるのかなどうか

という部分も含めて、なんのための懇話会だったのかなと疑問に思っているところでございます。これが正直な感想です。

【松崎委員】

車に乗っている方を卑下する言葉ではございませんので、誤解しないで下さい。車に乗っている方は意外と私のようにバスや電車に乗っている人たちから見ると、観光に関しましても、細かい所のことも気がつかないと思うんです。

そういうことで、私は今一番函館に何が必要か、ということの議論だと思って町連の環境部長を受けましたのでこの懇話会に参加させていただきましたが、1回目の会議は、とても私の力ではお話を聞くことだけで私の考えなど足下にも及ばないと思ひまして、2回目からは辞退させて下さい、勉強不足でとてもついて行けませんとお話しさせていただきました。しかし、やはり受けた以上はきっちりということを受けてやりました。

やはりバスや電車に乗ってますと、こういう所をもう少し函館として、ここを観光バスが頻繁に通る場所なのに、せっかく海が見え、それなのになんでこの道はこのように、今回1番気になりますのは西部地区に関してのこういうガーデンシティの函館という企画を立てられたと思いますが、海岸通りの、前に生徒さん達が浜の塀のところに絵を描いて、それが年数がたったから削除しますと言うことで、今まだ残ってますが、削ってますね。あれはあのままでほっとくんですか。いつもバスで通りまして、今日の海はきれいだわーというような声がします。観光客が一番言葉を出す場所なんです。それが年数がたったから古くなったからということで、削った後を見ましてもとても汚いんです。せっかく函館で楽しんで頂いたのに、ごくわずかなことですが、そういうことももう少し市の方では力を入れて、西部地区も大事だと思いますが函館全体の観光を考えてもらいたい。

例えば空港に関しましても、空港からの漁り火通り、278号線というところですが、以前は花や木を植えてとてもきれいだと思っていましたが、今は雑草の山です、正直なところ。国道、道道ということで、市では手を付けないということ聞いていますが、函館市の中なんです、あれは。ですから国道、道道、それに限らず、函館市の観光をプラスにしていく上でも、そういう観光の表情というものをもっと深く考えて、これからの函館の観光、西部地区の改革もよろしいですが、全体のことを考えていただきたいというのが、今回の私の考えです。

【木村座長】

ありがとうございます。私も感想をと思ったんですが、時間がないので手短かにですけど、この会議のスタートの時から非常に重要なキーワードを頂戴したと思います。コンセプトを考える場にしたいと、事務局にもお願いして忌憚ないご意見を頂戴できる環境を整えさせていただいたつもりです。成果があつて本当に幅広い意見を頂戴できて、具体的に報告書として整理してまいります。さきほど古地先生からも頂戴しましたが、美しい街づくり検討会でやった、美しい都市空間の形成を目指してと言うのは、まさにコンセプトの上の前段のですね、地域の方にも実際参加していただいて意見を集約した経緯がありまして、非常に苦しい限りでしたが、今回具体的に施工していくという直前の段階の中間的な、もう少し先鋭的なコンセプトにまとめられればいなとということで、この会を進めさせていただいた経緯があります。そういう意味では非常に忌憚ないご指摘も頂きましたし、この後、さらに部局横断また、国、道の方にもご理解頂きながら、

最後松崎議員からも頂戴しましたが，まさに函館という街自体が美しいという風になれる，これは15年，もしかしたら非常に長期にわたって取り組まなきゃいけません，とりあえず15年ということでスタートできるような，頑張ってくれという熱い気持ちが委員から市に届いているのではないかなと期待するところです。

この後の作業については，私も責任上，もう少し，このたたき台という資料自体，この議論を通じてですね，もう少しいろんな方に読んでいただきやすいように，見やすくレイアウトを変えて作らせていただこうと思っておりますので，またご相談することもあるかと思いますが，各委員にはご協力をお願いしたいということで，私の感想とさせていただきます。

それでは，ご感想を聞いているともっとやりたい気持ちがあるんですが，一応今日のこの議論としてはここまでで閉じさせていただきたいと思います。